

「日本のな多神教文化を称賛するばかりでは私たちは前へ進めず、時代の変化にうそをつくことになる。一神教の価値観を知る必要がある」と、同志社大学一神教学際研究センター長の小原克博教授(46)は語る。日本では少数派の一神教を学ぶ意義について、特に東日本大震災後を生きる視点を込めて聞いた。【鶴谷真】

小原克博さんに聞く

——一神教を縁遠いと感じる日本人は多いと思います。

◆世界人口約70億人のうち、キリスト教徒20億人、イスラム教徒15億人とされます。人口だけでなく影響力も極めて大きい。好き嫌いの問題を超えて、日本が国際社会で生きていくためには一神教を知らねばなりません。お金を払ってオイルを買うというビジネスパートナーとしてだけでは信頼感醸成されません。

——東日本大震災による甚大な被害を前に、一神教的考えを批判し、自然を大切にする多神教の良さを見直す言説が目立ちます。

◆とても分かりやすいのですが、事実はその単純ではありません。日本宗教が自然保護に熱心だったのかどうかは検討の余地がありますし、キリスト教の中にも、自然との共生を強こうたう流れがあるからです。明治維新後、まず日本の政治家や知識人が直面した一神教はキリスト教でした。欧米列強と対峙した時、その背景にあるキリスト教を当時の政治家や知識人は無視できませんでした。その際、実際にはキリスト教を否定して現れた啓蒙主義とキリスト教をこっちゃんにしてしまった。例えば、自然に対する人間の優位性を重視し、理性や合理性を重視するのはむしろ

一神教批判に異議

心のページ

啓蒙主義です。それが近代的な人間中心主義、個人主義を生み出した。問うべきはキリスト教よりも、近代とは何であったのかです。

——繰り返し自然災害に見舞われてきた日本で起こった原発の大事故については、

◆多くの近代的技術は、自然からエネルギーを人工的に抽出して人間のために使ってきました。それが書を及ぼし

「線を引き強く」強さの

で、命はすべてつながっていると考えてきました。自然を客観化する伝統を持たなかったと言ってもよいでしょう。人間と自然を切り離さず、線引きをためらいます。他方、ドイツが脱原発を決めた背景には「原発は人間の管理能力を超えており、人間は自然界に対する責任を取らねばならない」という倫理的判断があります。一神教を「自然を破壊、搾取し、操作する思想」とするのは誤解に基づいています。

——終末期医療についても問題提起しておられます。

◆延命治療について必要な線引きをためらい、問題を先送りしています。日本では患者が自分で食べられなくなる、外部から管で栄養を送る

動的に言うに至る。命の運動性を重視する日本の生命観の影響もあるかもしれません。方、欧米では無理やり生かして安らかに死ねなくするのは人間の尊厳に反すると考え、冒うのは非常に少ない。私たちは終末期医療における自己決定の大切さを学び、家族や周囲の人との対話を深める作法を確立すべきでしょう。

——一神教は排他的で戦争の原因になると言われています。

◆しかし多神教が平和で寛容というのは幻想です。日本が国家神道に振り回されて戦争へ進み、多大な犠牲を出した歴史に目をこらさずすることになります。何を信じても信じなくても、争いは常に人間の身近にある。一神教世界での紛

争があり、そこに事後的に宗教が絡み、結果的に宗教間紛争に見えることがあります。最近もアフガニスタンで米兵がコーランを焼いたために抗議デモと暴動が起きました。これは宗教の違いではなく、相手が大事にしているものを侮辱してはいけないという基本中の基本を欠いたゆえです。

——宗教がなくても私たちは生きていけるでしょうか。

◆生きていけると考えるのが世俗化論者です。洋の東西を問わず、社会が近代化して科学が発展すれば宗教は不可逆的に社会の片隅に追いやられると長らく考えられてきました。ところが70年代後半以降、世界各地で宗教復興現象が見られます。79年のイラン

うることは1960年代から問われている。公書は典型です。究極が原発事故でしょう。日本人は、人間は自然の一部

「冒う」が普及しています。患者の意志を置き去りにして家族は医師任せにし、医療の基本は延命ですから、ほぼ自

争が目立つのは確かですが、気をつけたいのは必ずしも宗教が原因ではない。多くは別の政治的トラブルや権力争い

革命がそうです。81年の米レーガン大統領当選はキリスト教保守派が支えたものです。戦後の日本でも、60年代の高度経済成長期の都市部で、故郷を離れた人々を膨大に取り込んだ新宗教教団の発展は宗教復興現象と言っている。私たち自身の宗教性を知れば、世界を理解する第一歩になります。その上で、日本の伝統と一神教を対立的に考えるのではなく、むしろ両者を架橋する文明的な知恵が求められます。その知恵なしには、原発や先端医療といった近代技術への批判的問いかけも、適切にはなされないのです。



—森園道子撮影

◇こはら・かつひろ 大阪府生まれ。同志社大大学院神学研究科博士課程修了。専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。著書に「宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅」など。